

【翻訳】

日本の「スピリチュアル」な未来*

日本版ニューエイジが描くヴィジョン

リゼット・ゲーパルト／インケン・プロール 著
広沢 絵里子・上田 弓子 訳

1 ミレニアムを前にした黙示録的ヴィジョン

他の先進工業国と同様、日本でも、ミレニアムに向けて2000年または21世紀を基準点に未来の行方を読み解こうとする出版物、マスコミ報道、そして様々な予言が増加していた。世界の滅亡が声高に唱えられた——その先陣を切ったのが、黙示録的な見解によって有名になった日本のジャーナリスト五島勉である。彼はすでに1973年に解説付きでノストラダムスの予言書を出版し、「1999年7月に世界は滅亡する」と主張していた。『ノストラダム

* 本稿は次のドイツ語論文の全訳である。Lisette Gebhardt und Inken Prohl (2000): „Japans ‚spirituelle‘ Zukunft. Die Visionen des japanischen New Age“, in: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung. Band 24*. München: iudicium, S. 3–13. 原注とは別に、訳注を示す場合、注番号にカッコ〔 〕を付す。参考文献としてあげられた文献の中で、2000年以降に出版年等の異動が生じている場合、新しい情報を反映させた。

本論文の日本語への翻訳について、および『明治大学大学院教養デザイン研究科紀要いすみあ』での公表についてご快諾くださった著者のゲーパルト氏（フランクフルト大学）とプロール氏（ハイデルベルク大学）に深く御礼申し上げます。また、翻訳にあたって、深澤英隆・飛鳥井雅友両氏による次の邦訳書を参考にさせていただきました。リゼット・ゲーパルト（2013）『現代日本のスピリチュアリティ 文学・思想にみる新霊性文化』岩波書店。（訳者）

スの大予言』と題されたこの本は、これまでに600万部以上売れている（五島 1999）。五島の著作がきっかけとなって、多数の終末予言が生まれただけでなく、来るべき世界について実に多種多様なヴィジョンが提示され始めたのである。

いたるところで表明された2000年問題への不安は、しばらくするとマスメディアの幻想であることが明らかになった。世界はミレニアムの転換をうまく乗り越え、3つのゼロの魅力にかき立てられた解説意欲も、引き潮のように去っていった。にもかかわらず、新宗教のリーダー、日本の「精神世界（ニューエイジ）」の代表者、芸術家、作家、そしていわゆる「霊性的知識人」たちが新千年紀をきっかけに描いた未来像について、一度考察しておく価値はある。ミレニアムに対する種々の意見表明は、日本人が未来をどのように思い描いているのかを教えてくれる。それはまた、現代の価値規範と社会的傾向を推測する手がかりとなろう。同時に、このテーマに関する出版物は、未来像（Zukunftsvisionen）の機能についても問いかけている。具体的には次のような問いである。未来像というものは未来への恐れを和らげることができるのだろうか。それとも娯楽に過ぎないのだろうか。または、その最も重要な役目は、文化の異なる諸領域を統合することにあるのだろうか。これらの観点については、まず多岐にわたる日本的未来像の現状を総括したのち、詳細に論じることしよう。

2 「精神世界」の未来展望

日本語で「精神世界 (Spirituelle Welt)」⁽¹⁾というとき、それは西洋的なニューエイジの日本版を指す。この「精神世界」という概念は、宗教的、秘教的、オカルト的なイメージや実践が、社会の広い範囲で受け入れられていることを示している、とされる（島藺 1996、1-8 頁参照）。日本にそのようなテーマが公に存在していることは、多くの事例が示している。たとえば、多数のテレビ番組や出版物が、臨死体験、宇宙人の来訪、「パワースポット」

めぐりを扱っている。書店の「精神世界」コーナーは次第に大きくなっていく。企業は「スピリチュアルな経営」もしくは「スピリチュアルなコーポレート・アイデンティティ」に関心を抱く。そして、代替的な自然療法には客が押し寄せている。

ニューエイジの思想と実践は、今日の世界が「合理主義」と「物質主義」に端を発する危機に瀕している、という前提から出発している。この危機は、個人や社会の変容を通じて克服されうるという (Heelas 1996 参照)。ニューエイジの信奉者は、遅々として進まない変化に活を入れるために、人類の古来の宗教的な知恵や実践——とされているもの——を再認識することに期待する (York 1995 参照)。ニューエイジはグローバルな現象であり、西側社会や日本だけでなく、たとえばシンガポールやマレーシアのようなアジアの新興国においても重要性を増してきている。

さらに日本では、「精神世界」の影響がこのような新たな宗教的シーンの境界線を大きく越え出ている⁽²⁾。ニューエイジ思想は、新宗教の教義の中に、そしていわゆる「霊性的知識人」のコンセプトの中に再び見出される。精神世界のモチーフは、芸術家、作家、批評家、そしてアニメ映画やコミックなどの娯楽産業によって取り上げられている (Gebhardt 2000 参照)。それゆえ、本論で以下に紹介するコンセプトと思想は、広く社会現象として見出される日本版ニューエイジ、という文脈の中に位置づけることができるのである。

新宗教・阿含宗の創設者であり指導者である桐山靖雄は、終末の予感と共により良い未来へのヴィジョンを伝える人々の一人である⁽³⁾。自著『1999年 カルマと霊障からの脱出』(桐山 1981)の中で、彼は間近に迫る世界の滅亡について語り、来るべき終末の前に人類がどのように救われるかについて述べている。桐山の見方はこうだ。世界は崩壊に向かっている。というのも、現代社会は自らが生み出した科学と技術をもはやコントロールすることができないからだ。さらに現代社会は、倫理や道徳や宗教のような過去の

諸制度や諸価値を破壊している、と桐山は言う。それゆえ彼は、護摩法要や瞑想修行のような仏教的といわれる方法を用いて、新しい型の人間、すなわち「超人的な能力」をもった „Homo excellens“ (ホモ・エクセレンス 原文ラテン語) をつくり出すことを要求する (Agonshû 1989, 7頁)。

新宗教の神の光協会 (GLA) のリーダーである高橋佳子もまた、現代という時代をややネガティブに評価している⁽⁴⁾。1996年の著書『ディスカバリー』の中で、彼女は21世紀へのヴィジョンを語った。20世紀に、西洋との接触が日本に現代の科学技術の成果をもたらしたことは確かである。しかし、それと同時に日本社会は、ストレス、道徳的腐敗、環境破壊、核の脅威という進歩によるネガティブな影響に直面している。高橋によれば、こうした発展は偶然ではなくて、人間のエゴイズムが増大した結果である。彼女は救済方法として「内なる解放」を喧伝する。「自己の探求」と「外界と内なる宇宙の調和」の認識を根本とするこの方法によって、人間は21世紀の困難を解決できるだろう、というのだ (高橋 1996 参照)。

自己、自己のゆがみ、そして「自己変容」も、「精神世界」の中心的なテーマとなっている。「精神世界」のはほぼすべての本や活動が基調とする考え方は、社会的影響、社会生活への適応、時にはネガティブな「スピリチュアル」作用 (あるいは電磁波) が幸福になるのを妨げている、ということである。しかし、個々人は、いくつかの方法を用いることによって「本物の」「スピリチュアル」な自己を認識することができ、これによりその人自身の状況も地球という惑星も改善できるという。変わりたいという渴望を癒すべく、「スピリチュアルな先達」や数多くの大小企業がセミナーやワークショップをたくさん実施している。自己を治癒するための聖なる処方箋を求めて、日本の伝承、世界文化や世界宗教が適宜活用される。目下流行しているテーマは、「シャーマニズム」、チャネリング、ニューサイエンス、神智学、占星術である。自己を加工するために多種多様な「スピリチュアル療法」が提供されており、その全容を見通すことはほとんど不可能だ。それは古典的な心

理療法に始まり、オーラソーマやアロマセラピー、はては前世療法やアメリカのヒューマンポテンシャル運動から発生した「自己啓発セミナー」(Haga 1995 参照)にまで至る。自己の内面の加工と変容は、「精神世界」の支持者たちの多くから、社会的な改革を押し進め、人間にふさわしい未来を創造するために不可欠な前提条件と見なされている。彼ら支持者たちの見方によれば、社会全体の状態は、個々人の洞察や変化にかかっているのである。

日本のニューエイジを代表する人々は、未来について熟考する際、とりわけ「スピリチュアリティ／霊性 (Spiritualität)」という「まじない文句 (Zauberwort)」に絶大な信頼を寄せている⁽⁵⁾。いわゆる「スピリチュアル・カウンセラー」の姫乃宮亜美は、人間は将来、自らの「スピリチュアリティ」を高めるために、神々と共に生きなければならないと考える(姫乃宮 1995、156-159頁参照)。神々のほかに、ニューエイジの代表者たちは、すべてを包括する宇宙的な力や宇宙霊のような超越的存在に助けを求める。アメリカのニューエイジの代表作を日本語に翻訳した山川亜希子は、世俗を超えたレベルからのメッセージを受けて自己を発見するには、チャネリングこそ必要だと説いている(山川 1995、147-150頁)。また、古代宗教(と呼ばれるもの)を再認識することも大流行だ。「精神世界」のもう一人の有名人、湯川れい子は、人間は「本来のリズム」へと戻ってこそ、意識を変化させて自分自身を感じることができると述べている(湯川 1995、142-146頁参照)。ニューエイジのコンセプトと実践は、芸術界や文学界でも受容されている。画家の横尾忠則は、「スピリチュアリティ」を未来にとって最も重要な価値として信頼している。すなわち、この宇宙的で、すべてをつらぬく力を獲得することが大切であるという(横尾 1995、135-138頁参照)⁽⁶⁾。

「精神世界」とカルチャーシーンを結びつける重要な役目を果たしているのが、東京の武蔵丘短期大学の助教授であり、自身の言によればシャーマン〔神主〕として活動している宗教哲学者の鎌田東二である^[1]。日本で鎌田の名が知られるようになったのは、特に奈良の天河神社の保存キャンペーンに

よってである。鎌田によれば、天河神社はあらゆる現象の結合と「生命力」の流れを象徴している。天河神社は、自然崇拜が中心に置かれたいわゆる「超宗教」の体験をもたらす、という。天河は「古神道」の中心地であった。ここで秘教的仏教が開花し、そしてここに、縄文時代の考え方に基礎を置く、日本人の神々や仏たちへの信仰（「神仏習合」）が保持されている、と鎌田は述べる⁽⁷⁾。この場所には、今日に至るまで「アニミズム」や「シャーマニズム」、「密教」や「多神教」が満ち溢れている（鎌田・津村 1994、10-16頁）。鎌田が強調するのは、このような類いまれなる特徴が、天河神社を未来にとって特に意義深いものになっている、ということだ。天河は「自然崇拜のメッカ」であり、この崇拜は「ディープ・エコロジー」と結びつく。それゆえ鎌田は、天河神社から重大な影響が波及していくことになるだろう、と予想する（同書、18頁）。

天河神社には、80年代以降日本で人気が高まった「代替医療」や気功の分野における有名人たち、さらにはビジネスパーソンや、学者、芸術家たちも訪れている⁽⁸⁾。たとえば音楽家の細野晴臣にとって、この神社はどの人間の中にもある「不滅なるイワクラ」を象徴している（鎌田・津村 1994、30-31頁参照）。著名音楽家の坂本龍一と、画家でありエッセイストの宮迫千鶴も、この神社の来訪者である。

3 「スピリチュアル」な未来予想と日本の文化論

ニューエイジのコンセプトは、同時代の作家たちの作品にも表れている。たとえば、ノーベル賞受賞者、大江健三郎の小説である⁽⁹⁾。彼の長編小説『人生の親戚』（1989）と『治療塔』（1990）がテーマにしているのは、間近に迫る終末であり、キリスト教的信仰が未来の「混合的な」宗教に変容することである。その混合的宗教は「民間信仰」に基づいていて、そこでは「スピリチュアルなコミュニケーション」が強固な教義にとって代わる。この二つのテキストで、一人の新たな救世主による救いが告知される。救済は日本

から始まるのである。

宗教的な色合いの濃い救済というモチーフは、大衆文化によっても取り上げられ、大きな成功をおさめた。その例として、1995年から96年にかけて放送されたアニメシリーズ『新世紀エヴァンゲリオン』や宮崎駿の『もののけ姫』（「霊的な姫君」の意。1998）があげられる。『新世紀エヴァンゲリオン』で人類は破滅に瀕している。復活の希望は「プロジェクト・エヴァ」にのみ託されている。聖書の登場人物、悪魔研究、カバラ、そして死海文書が暗示されることから、人類の救済は日本の主人公たちがこれらテキストの秘密のメッセージを解き明かすことができたときのみ可能になると、容易に想像される。

「スピリチュアリティ」という「まじない文句」を操る一群の知識人たちがいる。ここでは彼らを、日本の宗教学者、島藺進の造りだした概念を用いて「霊性的知識人 (spirituelle Intellektuelle)」と呼んでおく（島藺 1993、および、島藺 1996、247-270頁参照）。この概念が示すのは一種の「世俗的司祭」としての知識人であり、彼らは日本の宗教や、それが未来に対してどのような意義を持つかを論じ、加えてニューエイジの多様な思想をもとにして活動している（Prohl 1999 参照）。そうした知識人の中に、例えば、民俗学者で宗教学者でもある山折哲雄、哲学者の湯浅泰雄、心理学者の河合隼雄、すでに述べた鎌田東二らがいる。さらに最も著名な「霊性的知識人」として、かつて京都の国際日本文化研究所の所長や日本ペンクラブの会長を務めた梅原猛と、中央大学教授で宗教学者の中沢新一^[2]がいる。これらの「霊性的知識人」たちは、出版活動やメディアへの頻繁な登場によって日本の世論に多大な影響を及ぼしている。

梅原の見解によれば、「生命力」の尊重、全ての生物が平等であるとの教え、そして輪廻の考え方は、日本の宗教の基本的特徴を成しており、それらは「古神道」より発生したものである（梅原 1991 参照）。とりわけ、日本的な来世のイメージとそこに含まれている循環的思考には、未来にとって特に

重要な意味が与えられている。人間が、人間中心的態度を克服し、自分も一つの永遠に続く循環の部分に過ぎない、ということに認識するのに役立つのだという。梅原は、人間中心的態度がキリスト教的西洋的コンセプトに起因すると考え、これに日本の宗教を対置させる。自然崇拜の思想と、自然と調和して生きる必然性に関する知恵は、とりわけ神道に保存されている、と彼はいう。それゆえ、梅原によれば、神道には未来を作り上げるための中心的な役割が与えられるのである（梅原・山折 1995、209頁参照）。

梅原と同様、中沢新一もまた、現代人の人間中心的態度は西欧哲学の本質に起源があるとしており（吉本・梅原・中沢 1995、35-37頁参照）、神道や日本の「スピリチュアリティ」などの宗教的伝統に思いをいたすべきとしている。中沢によれば、「原神道」は、倫理的思想の日本的な原理を象徴しており（中沢 1992、296-297頁参照）、それは「神秘体験」を通じて啓示をもたらすという。そのような諸体験があるがゆえに、宗教は21世紀においても人間にとって重要でありつづけるだろう、というのが中沢の見解だ。宗教は「違う自分」を探し求める人間を助け、自己変容への秘められた可能性を開く。宗教は、人間に「拡大され、次元の高い世界」を体験させてくれる（中沢 1993参照）。鎌田東二は、宗教の代わりに「スピリチュアリティ（霊性）」について述べている。21世紀は人間を宗教から解放するだろう、と彼は期待を込めて言う。「霊的世界観」と「霊的人間観」が復権し、宗教の地位にとって代わるだろう。そして、科学と宗教の両極は相互に接近してゆくだろう、と（鎌田 1995、132-133頁）。

4 宗教的未来図と危機意識

新宗教の指導者、芸術家、知識人たちの描くさまざまな未来図を見てみると、ある危機への意識が彼らの間で明確に打ち出されていることがわかる。危機の理由について、前述の著者たちの意見はほぼ一致している。それは大体「現代」「物質主義」「合理主義」などに起因しているのである——責任は、

お決まりのあの西洋、あるいはキリスト教の影響にあるとされる。未来のために変化が求められている——しかし変化に導くべき道筋は極めて一般的かつ曖昧な概念でしか描かれていない。

次のことは驚くにはあたらない。新宗教では、仏教的だと称される方法において「宇宙の力」もしくは「根本的な調和」が重要視され、この方法が癒しとなる変容に導く道だと喧伝されるのである。また「精神世界」において、「スピリチュアリティ」という名の、漠然として、すべてをつらぬくパワーに大きな期待をかけていることにも納得がいく。というのも、ニューエイジは大体において、現代における宗教の一般的な変容、つまり「自分で手づくりする宗教 (Do-it-yourself-Religion)」として言い換えることができるからである。

知識人や芸術家たちが「スピリチュアル熱 (Spiritualitäts-Fieber)」に侵された、というのもまた重要な点だ。彼らは、危機といわれるものから脱出する道を探しているが、それは時に奇異の念を起こさせる道なのである。

中沢の場合もそうだが、宗教は自己認識の手段として喧伝され、21世紀には重要な役割を演じるようになることとされる。宗教は、体験能力の増強へと導く一つの体系的な方法として強調される。そのような宗教への評価が明確に示しているのは、中沢のように宗教学の専門教育を受けた知識人でもまた、今日の社会に特徴的な体験型文化と縁の深い、自己を指向する「精神世界」の影響からは逃れることができないということだ。現代的な宗教心に顕著な自己への固着がもたらす結末 (Bolz 1998 参照) について、あるいは、現代社会の体験マニア (Schulze 1999 参照) についての批判的な議論は行われていない。「スピリチュアリティ」の愛好は、次の点を熟考することなく引き継がれていく。それが自己の内であれ外であれ、「スピリチュアリティ」のようなパワーの承認は人間を未知の権威へと引き渡してしまう、ということ。

いわゆる「霊性的文化人」や、芸術家、ジャーナリストたちは、文化に比

重を置いた自分探し論議の中で、「古神道」と称するもの、理想化された古代、自然崇拝と自然との調和にある共同生活が主流だった過去の日本、といった想像の産物を提示する。「アニミズム」や「シャーマニズム」といった概念を助けに、日本の宗教は神秘のベールに取り巻かれる。しばしば、日本を他の国と区別するような日本特有の「スピリチュアリティ」が言及される。優れた日本の「スピリチュアリティ」は、日本の宗教と日本という国が重要な使命を果たすことの根拠としてあげられる。すなわち、「霊性的文化人」、芸術家、ジャーナリストたちは、日本を21世紀の世界の救世主と見なしているのである。救いのメッセージには、環境破壊や進行する物質主義、そして社会の荒廃に対する解決方法が含まれている。

5 おわりに アイデンティティ形成の要素としての未来図

以上のような数々の未来図、それも著名な学者や有名な芸術家たちによって掲げられた未来図は、日本的な文化議論の一つの典型を示している。具体的に言えば、学者や芸術家たちの間では、新時代を宗教的に解釈する図式が広まっているのである。政治的、あるいは社会的なテーマが日常的な話題として取り上げられることは少ない。文化議論は宗教や宗教学の分野から生まれる様々なキャッチフレーズにあふれている。宗教的なコンセプトへの逃避は、科学や他の「近代的な」解決策への失望のしるしとして解釈できるかもしれない。それらは、生きる価値ある社会の形成にとって、実際に役立ち満足できる方法を提供する力を失ったかのように見えるのだ。この逃避は、社会的な進歩を示す諸権威への不信感が増したことを示している。

見たところ、宗教者や学者たちの間では、21世紀における「スピリチュアリティ」の重要性について意見は一致している。この一致が示すのは、時代の境目およびその境目についての熟考が、異なる社会的諸力を統合しシンクロナイズさせることができるということだ。したがって、新千年紀への移行期が引き起こした未来予測ブームは、日本論の最新改訂版とみなすことがで

きる。それは、日本の同質性と不変性を呼び覚ます一つの言説である⁽¹⁰⁾。本論で触れた未来の諸構想において、未来が問題となっているのは単に表向きであって、本来のテーマは日本的宗教の特性と優越性なのである。

未来というテーマならびに宗教という対象は、いずれも定義が難しいがゆえに、とっくに多角化してしまった様々な文化領域を統合するのに適している。見逃されてはならないのは、このような統合の試みが、「近代(Moderne)」への不快感に起因しており、さらには日本の宗教の適切なイメージと、未来についての真剣な思案を犠牲にしてなされるということだ。日本の宗教は神秘化され、また「自己オリエンタリズム」⁽¹¹⁾の犠牲となる。そのオリエンタリズムの大部分は、西洋が抱くエキゾチックな想像からわき出たものだ。このことを説明するには、本論で紹介した諸構想が提示する「スピリチュアリティ」という概念に目を向けるだけで十分である。「スピリチュアリティ」とはつまり、近代の産物にはかならない。固有の宗教的・文化的な伝統を神秘化するのは、地上の諸文化がより密接に結びついていかなければならない21世紀にとって、悪い前提である。この進行中の過程で克服されるべきいくつもの葛藤は、個々の文化の優越性を強調することで不必要に先鋭化させられるだろう。

日本特有の自然崇拜、すべての生物は平等であるという日本的な理解、あるいは神道の「神秘的」な可能性、これらを示唆することがポスト工業化社会の諸問題を解決するのに適切かどうかは疑わしい。その示唆は、むしろ困難から目を逸らせることに一役買っている。結果として、本論で取り上げた宗教的指導者、知識人、芸術家たちの間で、未来のための現実的解決策についての議論は行われずじまいである。「スピリチュアリティ」への信仰から生み出された魅惑的な魔力は、多くの人がこの世の力と可能性に根ざしたヴィジョンを持って未来を議論することを妨げている。

21世紀の重要な特徴は、一般的な見解によれば「イデオロギーの終焉」である。イデオロギーの凋落にとって特徴的なものとして、世界的現象として

のニューエイジの興隆があげられる。それはすなわち、「何らの合理的制御も何らの神学も必要とせず、どんな立場の真理も受け入れる完全なシンクレティズム (混合主義)」としてのニューエイジである (Eco 1999、234頁)。

日本の事例は——他のアジア諸国を代表して——ニューエイジもまた、もしそれが「自己オリエンタリズム化」の論法として、21世紀における「東洋」の国々の優れた意義や優越性を呼び出すために用いられるならば、一つのイデオロギーへと変容しうるということを示している。東アジアから未来の救済がやってくることを、西洋はミレニアムの後も変わらず渴望しているようだ——しかしそんな救いの申し出について、まずは注意深く検証し、批判的に研究する必要があるだろう。一般に流布している投影やステレオタイプから解放された、文化的相互理解を深めるためにも。

原注

- (1) 日本の「精神世界」に関する導入的知識は、宗教学者・島薮進の著書 (1996) ならびに Prohl の論文 (1997) が与えてくれる。
- (2) 深澤英隆の分析を参照のこと (Fukasawa 2001)。深澤は狭義での「精神世界」と、より広い社会現象としてのニューエイジについて述べている。
- (3) 阿含宗は1954年創設。1970年代末より多くの新しい会員を獲得。今日では20万人の信者が属する。この新宗教については、室生 1987、Prohl 2004を参照のこと。
- (4) GLA は1969年、高橋の父親である高橋信次 (1927-1976) により創設された。今日では約2万人の会員を有する宗教団体である。高橋信次と高橋佳子の書籍のいくつかはベストセラーとなり、かなり広範囲の人々に受容されている。GLA については、沼田 1995を参照のこと。
- (5) 日本の文脈における「スピリチュアル」概念は Prohl 1999、111-116頁を参照のこと。
- (6) 横尾およびその他の人物については、Gebhardt 2001を参照のこと。
- (7) この確認により、鎌田東二は、歴史を思弁的に扱うことが特徴の、いわゆる「梅原古代学」の影響下にあると考えられる (Prohl 1999、77-78頁参照)。
- (8) 今日の日本でポピュラーな数多くの代替治療の中で、中国の「気 (生命エネルギー)

- ギー)」の教えに由来する「気功」が最も重要な地位を占めている。「生命エネルギーの働き」を意味する気功は、中国の身体教育技術のことである。
- (9) 論文 „A Nobel Laureate as a ‚New Ager‘. The Case of Ôe Kenzaburo“〔ニューエイジャーとしてのノーベル賞作家 大江健三郎のケース〕では、このテーマに詳細に取り組んでいる。Gebhardt 2002を参照のこと。
- (10) いわゆる日本論については研究論文が数多く出ている。宗教分野における比較的新しい研究は Davis 1998を参照のこと。
- (11) 「自己オリエンタリズム」の概念は柄谷行人にもとづく。現在、日本で用いられている「スピリチュアル言説」における数多くの論拠は、オリエンタリズム言説から借用されている。(Gebhardt 1999、Prohl 1999を参照のこと。)

訳注

- [1] 鎌田東二 (1951-) 哲学者、宗教学者。1991年に武蔵丘短期大学健康生活科助教授。2003年に京都造形芸術大学芸術学部教授。その後、京都大学こころの未来研究センター教授を経て、2016年7月現在、上智大学グリーンケア研究所特任教授、京都大学名誉教授。
- [2] 中沢新一 (1950-) 人類学者、思想家、宗教学者。中央大学総合政策学部教授等を経て、2016年7月現在、明治大学特任教授 (野生の科学研究所)。

参考文献

- Agonshû (1989): *The Agonshû. The Original Teachings of the Buddha. Tôkyô: Agonshû.*
- Bolz, Norbert (1998): „Selbsterlösung“, in: Norbert Bolz und Willem van Reijen (Hg.): *Heilsversprechen*, München: Wilhelm Fink, S. 209-219.
- Davis, Winston (1998): „Religion and National Identity in Modern and Postmodern Japan“, in: Paul Heelas (Hg.): *Religion, Modernity and Postmodernity*, Oxford: Blackwell, S. 169-185.
- Eco, Umberto et al. (1999): *Das Ende der Zeiten*, Köln: Dumont.
- Fukasawa, Hidetaka (2001): „Die ‚spirituelle Welt‘ (Seishin Sekai) Japans — Einführung und Auseinandersetzung“, in: Hilaria Gössmann und Andreas Mrugalla (Hg.): *11. Deutschsprachiger Japanologentag in Trier 1999, Band 1*, Hamburg: Lit Verlag, S. 647-660.
- Gebhardt, Lisette (1999): *Christentum, Religion und Identität—Ein Thema der modernen japanischen Literatur*. Frankfurt/Main.: Peter Lang.

- Gebhardt, Lisette (2000): „Die Herren der Geister‘. Volkskundliche Studien und Ethnofikation oder warum man in Japan gegenwärtig soviel Geisterforschung betreibt“, in: Hans-Dieter Ölschleger et al. (Hg.): *Japan Welten. Aspekte deutschsprachiger Japanforschung*, Bonn: Bier, S. 437–453.
- Gebhardt, Lisette (2001): „Okkultismus‘ als identitätsbildender Faktor oder warum es in Japan derzeit *en vogue* ist, von den Geistern zu sprechen“, in: Hilaria Gössmann und Andreas Mrugalla (Hg.): *11. Deutschsprachiger Japanologentag in Trier 1999, Band 1, Hamburg*: Lit Verlag, S. 703–714.
- Gebhardt, Lisette (2002): „A Nobel Laureate as a ‚New Ager‘. The Case of Ôe Kenzaburô“, in: Inken Prohl und Hartmut Zinser (Hg.): *Zen, Reiki und Karate. Japanische Religiosität in Europa*, Hamburg: Lit Verlag, S. 267–279.
- 五島 勉 (1999) 『ノストラダムスの大予言 迫りくる1999年7の月・人類滅亡の日』祥伝社 (初版1973年)。
- Haga Manabu (1995): „Self-Development Seminars in Japan“, in: *Japanese Journal of Religious Studies*, 22, (3–4), S. 283–299.
- Heelas, Paul (1996): *The New Age Movement*, Oxford: Blackwell.
- 姫乃宮亜美 (1995) 「21世紀人は神と共に生きる」『大世紀末 1999年 21世紀を読み解く予言99』所収、156–159頁。
- 鎌田東二、津村 喬 (編) (1994) 『天河曼陀羅—超宗教への水路 (チャンネル)』春秋社。
- 鎌田東二 (1995) 『宗教と霊性』角川書店。
- 桐山靖雄 (1981) 『一九九九年カルマと霊障からの脱出』平河出版社。
- 室生 忠 (1987) 『阿含宗世界平和への道』博栄出版。
- 中沢新一 (1992) 『森のパロック』せりか書房。
- 中沢新一 (1993) 『中沢新一の宗教入門』マドラ出版。
- 沼田健哉 (1995) 『宗教と科学のネオパラダイム—新新宗教を中心として』創元社。
- Prohl, Inken (1997): „Zwischen ‚Spiritualität‘ und Kommerz. Einige Anmerkungen zum New Age in Japan“, in: *Spirita. Zeitschrift für Religionswissenschaft*, 11 (2), S. 12–15.
- Prohl, Inken (1999): „Die ‚spirituellen Intellektuellen‘ und das New Age in Japan“, Dissertation am Fachbereich Geschichts- und Kulturwissenschaften der Freien Universität Berlin, 1999.
- Prohl, Inken (2004): „Solving Everyday Problems with the Help of the Ancestors: Representations of Ghosts in the New Religions Agonshu and World Mate“, in:

- Susanne Formanek, William LaFleur (Hg.): *Practicing the Afterlife. Perspectives from Japan*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, S. 461–483.
- リバー出版編集部（編）（1995）『大世紀末 1999年 21世紀を読み解く予言99』リバー出版。
- Schulze, Gerhard (1999): *Kulissen des Glücks. Streifzüge durch die Eventkultur*, Frankfurt/New York: Campus.
- Shimazono, Susumu (1993): „New Age and New Spiritual Movements: The Role of Spiritual Intellectuals“, in: *Syzygy. Journal of Alternative Religion and Culture*, 1 (1–2), S. 9–22.
- 島藺 進（1996）『精神世界のゆくえ—現代世界と新霊性運動』東京堂出版。
- 高橋桂子（1996）『ディスカバリー—世界の真相への接近』三宝出版。
- 梅原 猛（1991）『「森の思想」が人類を救う—二十一世紀における日本文明の役割』小学館。
- 梅原 猛、山折哲雄（1995）『宗教の自殺—日本人の新しい信仰を求めて』PHP 研究所。
- 山川亜希子（1995）「自分に気づき愛するとき」『大世紀末 1999年 21世紀を読み解く予言99』所収、147–150頁。
- 横尾忠則（1995）「人が霊性に目覚める時」『大世紀末 1999年 21世紀を読み解く予言99』所収、135–138頁。
- York, Michael (1995): *The Emerging Network: A Sociology of the New Age and Neo-Pagan Movements*, Boston: Rowmann and Littlefield.
- 吉本隆明、梅原 猛、中沢新一（1995）『日本人は思想したか』新潮社。
- 湯川れい子（1995）「大いなる自分に出会うこと」『大世紀末 1999年 21世紀を読み解く予言99』所収、142–146頁。